

倭繪につきて(續)

下村三四吉

(十三) 鳥羽僧正とその作品

前節には倭繪の春日派と土佐派との區別について述べ、平安時代末期に於ける土佐派の名匠たる僧覺猷(鳥羽僧正)や藤原光長などに關しても一言した。よつて、以下の二三節には其等の人々の作品について稍詳しい説明をして、次第に鎌倉時代以後の變遷に説き及ぼさうと思ふ。

鳥羽僧正覺猷は宇治大納言源隆國の第九子である。鳥羽上皇の御信任を辱くし、鳥羽の離宮に召されて法要の御尋ねに預り、また鳥羽にて新に寺を賜はせられたほどであつた。僧官の閱歴はこゝには略するが、大僧正にまで進み、保延四年には天台の座主に補せられ、同六年(一一八〇)八十八歳の高齡で入寂した。もとより名僧にはちがひないが、宗教上にはさほど擧ぐべき功績もないやうである。然るに、僧正の繪畫の技倆は特に著しく、本邦の繪畫史上に重要な位地を占めて居る。その筆力も著想も非凡であつて一家の格法を開き、自ら鎌倉時代に於ける繪畫發達の先驅となつた。

鳥羽僧上の遺作として今日に傳はつて居るものは、山城梅尾高山寺所藏の『戲畫』三卷が最も名高い。三卷の中の二卷は、猿・兔・狐・蛙等、一卷は人物の遊戯を描いたものである。何れも、座作・奔馳・格闘等の態を巧に寫し出し、滑稽の妙言ふべからず。多くは嘲世諷俗の意を寓したものであらうと思はれるけれど、詳しいことはわからぬ。その筆致は簡約輕快にして、しかも寫生の眞趣を得、樹草の畫法及び山石土坡の皴法等は

倭繪の典型を成して居る。

この外、奈良縣生駒郡信貴山なる期護孫子寺の所藏『信貴山緣起繪卷』三卷も古來鳥羽僧正の筆と傳へられて居る。これは僧明蓮が勸請した當寺の毘沙門天の靈驗の事柄を描いたもの、その筆者の鳥羽僧正であることは明證はないけれど、これを前述の『戲畫』に對較すると、筆致はいふに及ばず、表情・活動等の状態に至るまで共通類似の點が多いから、鳥羽僧正の筆と推定するのは、最も近いのであらう。この繪卷の用筆は輕快にして適動能く活動の趣に富み、着色はしてあるが、淡泊にして却て品位をそなへて居る。

『信貴山緣起繪卷』に關しては注意すべきは平民の生活がよく描き出されて居ることである。隆能筆の『源氏物語繪卷』に多く貴族生活が現はされて居ると較べると面白い對照である。且、この兩繪卷はそれ／＼その筆者を異にするため、前に述べたやうに、描寫の筆法もよほどの趣を別にして居る。源氏繪卷の方は春日派の特色を見るべく、信貴山繪卷の方は土佐派の一種の風格を窺ふことができる。優雅なる貴族的生活を描くには春日派の筆致がよくそれに適し、活動的の平民生活法を寫すには土佐派の筆致がもつとも相應する。倭繪に於けるこの兩様式は、次第に各々その特色を發揮し、或は相離れ或は相會ひ、折衷混融も自然とその間に行はれつゝ、鎌倉時代の繪卷物の大發展を促すに至つたのである。

『戲畫』及び『信貴山緣起繪卷』について、更に注意すべきことがある。從來倭繪の多くは彩色の裝飾的なるを離れてその特長を發揮することができなかつた。これは手法の不十分な爲めである。然るに、『戲畫』に於いて、鳥羽僧正は實に水墨の非凡なる手法を示した。『信貴山緣起繪卷』の方は前に述べたやうに着色はしてあるけれど、寧ろ淡泊な着色で、しかもよく多面の人事自然を描寫してある。鳥羽僧正の畫事に於ける。師

承者は誰であつたか一向知られて居らぬのが、僧正は實に繪畫の天才的技倆を有し、從來の倭繪の趣向に満足せぬ所から、獨創的に新生面を開いたのであらう。なほ、また繪卷物に於いて、人間界の事を描き出すのみならず、その背景として、天然風物の状態を寫すことも、平安時代末期からおひ／＼盛んになつて來たが『信貴山縁起繪卷』には山水の描寫について、またその特色妙技が發揮せられて居る。この方面に對しても、鳥羽僧正の開拓の功は少くない。當時時勢の變動の影響として、倭繪にも新生面を開くべき氣運が發生したのではあるが、その氣運の發達を促した功勞者の一人は鳥羽僧正であるといつてもよからう。

(十四) 藤原光長とその作品

鳥羽僧正に相並んで平安時代末期の繪畫界の明星たる藤原光長は、畫名の高い割合には、その傳記が一向よくわからぬ。或は隆親の男とし、或は隆親の子經隆の男とし、或はまた經隆の子邦隆の男となす等、諸書の記すところ一致せず、且何れも正しき出處がないから、要するに、その父祖はよく知れぬといふに歸する。また、土佐と稱したとも傳へられて居るが、一方には春日と稱したといふ傳へもある。但し、官位は從四位下・刑部大輔に至り、畫名の一世に高かつたことは確かである。高倉天皇の承安三年(一八三三)に勅によつて最勝光院の障子に日吉御幸・平野御幸の圖を畫いたことは、『玉葉』に記されて居る。また年中行事六十卷を畫いたことも傳へられ、『古今著聞集』に「後白河院御時、年中行事を繪にかゝれて、御賞翫のあまり(中略)蓮華王院の寶藏にこめられにけり」とあるものが、即ちそれであらうと考へられて居る。

右の『年中行事繪卷』六十卷は、その後官庫に收藏せられたが、安永内裏炎上の時、灰燼に歸したのは返す／＼惜むべきことである。但しその略寫の模本十六卷は傳はつて居る。この外に光長の筆と傳へらるゝ遺

品には、『伴大納言繪詞』、『病草子』、『餓鬼草子』、『地獄草子』、『吉備大臣入唐繪詞』等がある。『伴大納言繪詞』(伯爵酒井忠道氏藏)は、清和天皇の貞觀八年大納言伴善男内裏の應天門を焼き、その罪を左大臣源信に負はせて己れその職に代らんとせしも、後に事あらはれて流刑に處せられた事蹟を畫いたものである。その筆致は勁健飄逸にしてよく活動の趣を寫し出し、人物の面貌は巧に種々の變化を試みてある。着彩はやゝ粧漫なるやうに見えるけれど、これは畫面の皴裂甚しく顔料の剝落した所の多いたためで、初めからさうであつたのではない。大體の筆致上から言へば、鳥羽僧正の遺作と同一系統をなせる様式である。

『病草子』は異疾者の圖を畫きたるものにて、數卷各々その所藏を異にしたれば、今こゝに一々は述べぬ。別に殘飲數葉あり。もと一部數卷具足せるものが散佚したものと思はれる。『餓鬼草子』一卷は備前國曹源寺の藏。筆致は『病草子』とよく似て居る。『地獄草子』は原本の現存するものが四卷あつて、内二卷は益田孝氏の所有、一卷は高橋是清氏の所藏、他の一卷は岡山の安住院に在る。何れも畫は光長の筆、詞書は寂蓮の筆と傳へらる。もとはこの外になほ數卷あつたものであらう。肥瘦の著しい勁健の線もて極めて豁達に描いてある。宛轉輕快の趣は稍乏しいが、適強沈着の態が十分に備つて居る。『吉備大臣入唐繪詞』の事は暫く略する。

光長筆の遺品と傳へらるゝものに、更に『粉川寺縁起卷』がある。『考古書譜』に「二卷、光長、詞雁經卿」とあるものは、今所在が分らぬ。現に紀伊の國寺に傳はつて居るものは一卷で、寺傳には鳥羽僧正の筆といつて居る。畫風は『信貴山縁起繪卷』に類似する所が多い。

以上舉げた光長筆と傳へらるゝ諸繪卷の遺品は、そのすべてが光長の眞筆であるといふ確證はないが、此

等に共通した筆致を観れば、所謂光長の畫風の主要は知ることが出来る。前にもたび／＼述べたやうに、光長の畫風は鳥羽僧正のそれと類似した點が多い。この兩大家が殆ど時を同じくして出で、勁健暢達なる畫風と、以て倭繪の新生一向を開拓したことは、その影響について十分に認めねばならぬ。

(以下續掲)

舊 師

八

郎

わが少年の日の歌の師、故郷にて失せたまひぬと
さゝて思ふまゝを歌ふ。

「で、けり、けむ、つゝ」とつゞて八衢を教へまし、はたゞに昨日を
垣の萩軒の高萱さや／＼にうたひたまひきあはれそのこゑ
涙おつばかりおぼえてきゝ入りし歌の御聲に似る聲もあれ
ふみてゆく道はたがへどもわが道もよしとぞ君は思ひたまひし
別るべき道とは知れど別れにし君とは更におもほえなくに
明け馴れて幾度われの入りつらむきしむならひの君が格子戸
城跡のいたゞきの火のたゞ一つほのめく道を夜毎通ひし
「心して歸れ夜くらし道悪し」椽に出で、はよくのたまひき
冬の夜の炬燵を中の物語り君しまさねば誰れとすべきぞ
よそにのみなりぞゆくべきをり／＼は君ます故に歸りし故郷